

私の戦争を実感したこと

紫の薔薇 静岡県生まれ♀

仕事・家庭・子育てに30年間、充実した日々を過ごしました。そして、子供が独立したことをきっかけに、今までの人生を振り返って、遣り残したことを考えました。それは、立教大学の大学院で好きな研究をすること!!!! がんばります。

私は、イギリス・ヨーク市の歴史がある町並みが大好きで、いままで9回も訪れています。今年の2月にイギリス・ヨーク市に行ってきました。特に、ヨークミンスター(大聖堂)が好きで、毎回訪れます。今回も、旅行の初日にヨーク大聖堂を訪れたのですが、残念ながら入館できませんでした。多くの参列者でしたので、最初は、偉人が亡くなられたから入館できないのかと思ったのですが、それは、「イラク戦争で、戦死した21歳の兵士のお葬式が行われるので入館ができない。」とのことでした。お葬式には、多くの軍人が参列していて、盛大なものでした。そして、今もイギリスは戦争をしているのだと実感し、イラク戦争というものを身近に思い胸が締め付けられました。ご両親の心中をお察し、道路の向こう側からご冥福をお祈りしました。

今までの世界の歴史において、戦争景気による国益を得る必要があった事は確かだと考えます。しかし、それにも増して、平和の大切さを知っていて、唯一の被爆国であるの日本は、「正しい戦争はない。」と国際的に訴える必要があると思います。

いかなる正義や理論を展開されたとしても、生命を奪いあう戦争は、絶対に反対です。

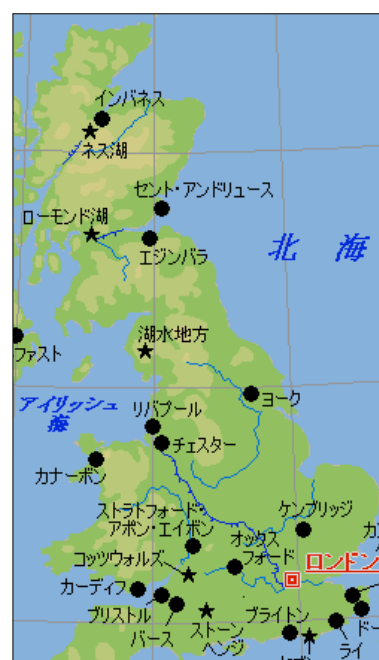
ヨーク市

ヨークは北東部にあり、ロンドンから約2時間の場所に位置しています。イギリスで最も古く、最も歴史的に重要な街の一つです。古都ヨークには、イギリス史の縮図を見ることができます。古代ローマ帝国の時代から政治、文化、宗教、商業の中心であったヨークは、豊富な遺産があります。中でもヨーク大聖堂はヨーロッパ一大きな大聖堂として知られています。

今日では歴史を重んじつつ、国際的な都市として発展しています。

ヨークを囲む古代の壁からこの街のルーツを見ることができ、保存状態もよいと言われています。

産業革命まで、ヨークはロンドンに次いで人口第二位の座にあり、英国の歴史を形成する上で重要な位置を占めていました。



市	人口	面積
ヨーク市	193,300 人(2007 年)	271.94km ²

ヨークの歴史は、占領の歴史で、ローマ人が北ヨーロッパの指令中心地として選んだこの場所(その頃ヨークは Eboracum と名付けられていた)は、867 年にはデンマーク人に征服され、その名を Yorbik と変え、11 世紀にはバイキングに占領されました。バイキングとその言語の影響は、「通り」という意味の接尾辞 gate の付いといわれています。市を取り囲む石の壁は 14 世紀に建てられ、この頃から王室の第二王子には「ヨーク侯」の称号が与えられています。

2007 年度 European Tourism City of the Year を受賞し、イギリスの遺産都市であり、魅力的な歴史や現代的な観光名所が融合したリバーサイドの城郭都市であり、国際的で洗練された都市となっています。また、北部へ行くと美しいヨークシャーデールがあり、ヨークシャーの他の地域を探索するのに最適な拠点地です。

ヨーク大聖堂

ヨーク・ミンスターまたは**ヨーク大聖堂** (York Minster、正式名称:ヨークの聖ペトロ首府主教座聖堂、The Cathedral and Metropolitan Church of St Peter in York)は、イギリス、ヨークにあるイングランド国教会の大聖堂。ヨーク大聖堂の歴史は遠くローマ時代に遡る。初めから教会があったわけではなく、ローマ軍の本部がここにおかれていた。紀元 306 年には後のローマ皇帝コンスタンチウスはここを訪れているが、彼はローマに帰国後の 312 年にキリスト教を公認した。南側の翼廊(transept)を出たところに彼のブロンズ像がある。建物は中世ゴシック建築としては北ヨーロッパで最大のものといわれる。現在の位置に教会が建てられたのは、ノルマン征服後の 1080 年から 1100 年にかけてであった。そして現在の建物が造られ始めたのは 1220 年であり、ライバルであるカンタベリー大聖堂と同規模の建築を目指して 250 年をかけ 1472 年に漸く完成したのであった。南のカンタベリーに対抗する壮麗な大聖堂であり、映画「エリザベス」ではその戴冠式の場面に登場している。聖堂内は明るく、光が入ってくるステンドグラスは世界最大級で、特に有名なものは北の翼廊にある“Five sisters Window”(『5 人姉妹の窓』)。1260 年頃に作られ、当時のまま、今もなお完全に残っているものだそうで、うっとり見とれてしまいます。薔薇窓のステンドグラスは、リチャード 3 世が王位継承をめぐる対立するヨーク家とランカスター家の間で繰り広げた**薔薇戦争**

<http://www007.upp.so-net.ne.jp/togo/dic/ha/bara.html> が終結した直後に完成した。中央のヒマワリを取り囲む赤薔薇と白薔薇は、1486 年にヘンリー 7 世がエリザベス・オブ・ヨークを娶ったことでヨーク家とランカスター一家が一つになったことを象徴しています。世界最大の中世ステンドグラスの窓です。

建築物は長さ 160m、幅 76m、英国で最も重要な場所の一つに数えられています。

NHK クローズアップ現代 2010/6/9 放映

http://cgi4.nhk.or.jp/gendai/kiroku/detail.cgi?content_id=2901

イラク戦争を問う ～イギリス検証の波紋～

イラク戦争から 7 年。なぜ戦争に踏み切ったのか。どのような意思決定がなされたのか。戦争に至るプロセスの検証を求める声が日本や世界各地で出始めている。こうしたなかイギリスでは、去年から徹底的な検証が始まっている。独立調査委員会によるこの検証では、これまで機密とされてきた政府の文書が公開され、ブレア元

首相をはじめ、意思決定を行った当事者80人以上に対する公開の聞き取り調査が行われ、その様子はテレビやインターネットでも公開されている。戦争をめぐる意思決定のプロセスを公的に記録し、未来への教訓を読み取ろうというこの検証。背景には、常に戦争と向き合い、そのたびに検証を行ってきたイギリスの歴史と伝統がある。戦争を検証することの意味は何か、そして、イギリスはそこから何を学びとろうとしているのかを探る。

英・オックスフォード大学教授 アダム・ロバーツさん(ロンドン衛星中継)

防衛大学校教授 等松春男さん

出演者の発言

【スタジオ1】

●今回、この意思決定のプロセスを公開した意義について

>>人々の意見が大きく分かれた問題でした。この調査委員会は、まず、その点を浮き彫りにするチャンスだったわけです。そして、大変論議を呼ぶ決定だったということ。それぞれの言い分が、それぞれもっともだと言えるような問題だったというその部分を認識するということですね。そして、イギリスの国民は、これは、日本の国民もそうでしょうけれども、アメリカのプードルというのは嫌なんですね。アメリカの言いなりになるということ。そういう意味で、政府の意思の決定の資質に問題はなかったのか。もっとアメリカに対して自分たちの言い分をぶつけるべきではなかったのか。そこを問うことだったわけです。

●イギリスでは、今後もこのような透明性が確保されていくのか？

>>その点、確かに意義深いことでした。そして、新たな重大な事実も学びました。それまでは機密だったことなんですから、例えば、国際法の専門家、これは外務省の顧問ですけれども、非常に反対だったということなんですね。イラクに対して安保理のお墨付きなしの開戦は強く、はっきりと反対する立場だったのです。

●イギリスは、なぜ独自の視点で危機を認識できなかったのか？

>>それは、一つには労働党政権とそのリーダーシップの問題です。一つ、私が強く感じたのは、この政権には歴史的な視点がありませんということですね。今、直面している問題が過去に、この国が直面した問題と似ているという視点ですね。ですから、イギリスは、アメリカも、そうでしたけれども、甘い考えだったわけです。イラクは独裁者をなくせば大丈夫だと考えたわけです。

●イギリスの安全保障の仕組みの、どのような点が明らかになったのか？

>>そうですね。一つには、政府には危険があったということですね。小さな一部のグループに内閣を牛耳られるという危険があったわけです。これは、はっきりいって健全なことではありません。議論の大切さですね。内閣全体で、やはり議論をしなくてはならないわけです。

【スタジオ2】

●将来、もし政策決定者が、このように公の場でみずからの説明責任を問われるようになったら軍事的な手段は取りにくくなるか？

>>その可能性はありますね。私自身の考えでは、これほど重要なことの決定ですから

戦争を始めるか、どうかという、やはり、はっきりとした考え、国民にきちんと説明、釈明できるような立場、今だけでなく、数年後も釈明できるような立場を持つことは重要ですね。ですから、この調査委員会のプロセスはいいことかもしれません。政治家は、今後、そういう可能性があるということを知っているようだ。

●今回の調査から学んだ最大の教訓は

>>そうですね。

イギリスにとっての、はっきりとした教訓、それは日本も参考になるかもしれませんが、やはり、相手が同盟国であっても、言いなりというのはよくないということですね。自分なりの考えを持つこと、そして、それを相手に伝えて議論をするということですね。イギリスの場合、それも少しはありましたけれども、全体としては、そうではなかったわけです。アメリカに従うことにしました。少なくとも首相は、そう決めました。そして、この調査委員会では、イギリスは、1920年代にイラクの大変さをすでに経験しているんですけども、そういう教訓、そういう歴史的な視点の大切さですね。それを忘れてはならないということ。それも調査委員会でわかりつつあります。

●例を見ない公開性、透明性を重視した、この検証について

(等松)>>イギリスでは、この種の検証委員会というのは、従来、たくさんあったんですけども、今回は、その結果のみではなくてプロセスが随時公開されているという点が非常に目新しいと思います。ただ、それ以上にやはり重要なことは、比較的近い過去の事件について、膨大な文書と当事者たちの証言が集められているところが画期的だと思います。これは、やはり5人の委員のうち2人が、一流の歴史学者が入っているという点にも、その意気込みが表れていると思います。すなわち、国家の歴史の1ページに恥じないだけの行為を行わなければいけないという感覚が感じられます。

●安全保障政策を遂行していくうえで歴史的視点の大事さ

>>やはり、ロバーツ教授もおっしゃってましたように、イギリスは、1920年代のイラク統治で大変な苦勞をしたわけなんですけれども、またイギリス人は伝統的に歴史というものを重視する人々のはずだったんですが、なぜかイラク戦争のときにはその教訓というものが忘れられてしまっていたと。そういう意味で、歴史的感覚を取り戻すということが大事なんです、歴史的視点が欠けてるという意味では、むしろ日本のほうが、はるかに深刻で、65年前に敗れた戦争の公的な検証を、日本人自身が行っていなかったという意味で、われわれのほうが思考停止に陥っているということを感じます。

●今後、安全保障を考えていく外交を考えていくうえで大事になってくる軸は

>>確かに戸惑う事態も多いとは思いますが、やはり、基本的な問題について、主体性を持っているということが最も肝心だと思います。やはり、主体性を持つためにいちばん重要なものというのは、リアリズム、すなわち、バランスの取れた現実感覚を持つことだという気がいたします。バランスの取れた現実感覚を持つために、いちばん大切なことは、タブーをなくしてあらゆる問題を多角的に自由に論議する場と空気だというふうに思っております。その点で、やはりイラク戦争の検証というものは、歴史的な感覚とリアリズムというものを、イギリス国民に、もう一回取り戻させるためには、必要なことだったのではないかと、というふうに私は感じております。

●ロバーツ教授も、イラク戦争において、イギリスは主体的な自分の考えがなかったのではないかと、いうところまで踏み込んでいた

>>はい。その点で、やはり私たちも過去の歴史について、もう少し長い視点で見ると、またその長い視点の中に、現在を置いてみるという、そういう感覚を養わなければいけないというふうに私は思っております。

①琉球新報の社説 「平和賞受賞演説『正しい戦争』より

「自衛のため

の戦争」容認は、大統領就任前からイラク戦争に一貫して反対してきたオバマ氏とも思えない。報復の連鎖で、兵士よりも市民におびただしい犠牲を出しているアフガンなどの現状を見れば、紛争も致し方なしとはならないだろう。受賞演説でオバマ氏は、米公民権運動指導者のキング牧師や、インド独立の父ガンジーを評価する一方、2人の非暴力主義は「いかなる場合でも現実的で可能だったわけではない」と指摘した。これも戦争を真正面からとらえる異例の見解だ。確かに、国際テロ組織アルカイダなどの犯行は許されるものではない。国際社会が結束して対応する必要がある。ただ、大規模な軍隊を次々と投入し、泥沼の戦場と化してしまつては市民が巻き込まれ、惨劇を広げるだけである。激しい地上戦を体験し、戦争の実相を知る沖縄の人々からすれば「正しい戦争」などあり得ないというのが道理だろう。

オバマ氏は「彼ら(ガンジーやキング牧師ら)が唱えた愛はどんな時もわれわれを導く北極星でなければならない。その信念を軽んじれば道義上の羅針盤を失うことになる」とも呼び掛けた。

その思いがあるなら、殺りくを肯定するような釈明などせず、「いかなる戦いも、犠牲も許されないと宣言した方が明解だ。それこそ平和賞にも値しよう。核なき世界への一歩は、そこから始まるととらえたい。<http://ryukyushimpo.jp/news/storyid-154107-storytopic-11.html>